

## 論文

### モニカ・マドンという生き方 ——『余った女たち』における働く女性たちの表象

坂田 薫子

#### 序——誰が「新しい」女か？

ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) の『余った女たち』(*The Odd Women*, 1893) はこれまで「ニュー・ウーマン・ノベル」として読まれることの多かった作品である。メアリ・バーフットがグレート・ポートランド・ストリートに設立した女性のための職業学校はランガム・プレイス・サークルがモデルになっていると考え、メアリとローダ・ナンをいわゆるカギ括弧付きの「新しい女」ととらえ、そこにギッシングの意図を読み取ろうとする読解法である。<sup>1</sup> 確かにメアリが第13章で学校に集まった生徒たちに向かって行うスピーチ「侵入者としての女性」の内容は、レイ・ストレイチー (Ray Strachey, 1887-1940) の『イギリス女性運動史』(*The Cause*, 1928) の第5章に詳しいように、「女性にも教育と職を」と主張したランガム・プレイス・サークルのスローガンに共通しており、こうした解釈を採る研究者が多いのも頷ける。

しかしアリス・マーコウ (Alice B. Markow) は、ギッシングが1890年以降に出版した、『余った女たち』を含む作品群に描かれている「女性にも教育を」、「男女に平等な雇用の機会を」、そして「性のダブルスタンダードの廃絶を」といったフェミニストたちの求める権利は、実は1890年代までに「解決の方向に向かっていたり、すでに解決したりしていた」(58) ため、ギッシングの描くフェミニスト的な係争点には「意識の実質的な発展や、ものの見方の急進的な転換が何一つない」(58) と指摘する。<sup>2</sup> 確かにストレイチーの著書の第12章に詳しいように、ランガム・プレイス・サークル

が1850年代に女性雇用促進協会を設立してから30年の間に女性の雇用は急速に拡大しており、1890年代に入るとフェミニストたちは「女性の職の種類を増加を」、「男女に平等な賃金を」という次の段階の要求を社会に求め始めていた。そのため、メアリとローダは1850年代には新しいタイプの女性であったかもしれないが、ジョイス・エヴァンズ (Joyce Evans) の表現を借りれば、1890年代にはすでに「時代遅れ」(2) の存在であり、二人に1890年代の象徴である、カギ括弧付きの「新しい女」を見出そうとするのは少々無理があるようだ。

そのためだろうか、近年の研究者たちの中にはキャサリン・マリン (Katherine Mullin, *Working Girls* 67) のように、メアリが開設した学校を女性雇用促進協会が1884年にチャンセラー・レーンに開校した、女性のための初めてのタイプ学校に類似したものととらえる者も存在している。グラディス・カーナファン (Gladys Carnaffan 82) によると、19世紀後期、速記とタイプができる事務職員のニーズが増えると、それらの訓練を行う学校がロンドンだけでも1892年の12校から、1899年の39校に増えたという。そうしたことを踏まえると、マリンの指摘のように、メアリとローダの学校は「女性の職の種類を増やそう」という主旨で開校された、いわゆる職業学校と見なす方が適切であるように思われる。

こうしたことを鑑みると、メアリとローダには古さと新しさが混ざり合っており、二人をこの小説が出版された1890年代を映し出す最先端の女性、言い換えると、1890年代という時代を象徴する「モダニティ」を体現している女性たちと言い切るのは控えた方がよさそうである。それでは真の意味で新しかったのは誰かと考えると、サリー・レッジャー (Sally Ledger) がその研究書 *The New Woman* の第6章で指摘するように、ショップガールのモニカ・マドンなのではないか。アーリーン・ヤング (Arlene Young) は論文 “Character and the Modern City” の冒頭で、ギッシングの1890年代の作品において、都市は作品の背景ではなく、一つの「独立体」(50) として存在しており、「都市生活とその状況」(50) をどのように巧みに処理していけるのかに登場人物たちの個性と能力が示されていると主張する。そのうえでヤング (50) は、これらの作品群においてロンドンを (そして広く世界を) 知り尽くしている登場人物としてエヴェラード・バーフツ

トを挙げているが、実は『余った女たち』においてロンドンの地理と地図を最もよく把握しているように思われるのは、列車、地下鉄、オムニバスを自由に乗りこなし、街の文化的サインを正しく読み取っているモニカ（そして彼女のルームメイトのミルドレッド・ヴェスパー、さらには彼女の元同僚で、のちに街の女となるミス・イードたち、ワーキング・ガール）である。彼女は勤め先に住み込みで働いているため、通勤手段として毎日同じ路線を利用しているのではなく、休日や勤務時間以外の所用のため、実に様々な路線を自由に乗りこなしている。鉄道が次々と敷設され、地下鉄が目新しかった当時のロンドンの路線図は複雑で、乗り入れも多く、新しい駅が開設されたり、それに伴って古い駅が閉じられたりしたために、目まぐるしく路線図が変わっていた。その様子は日々変化していくロンドンという大都市の変容の象徴とも言えるだろう。それを迷うことなく乗りこなすワーキング・ガール、モニカこそ、最も新しかった女性なのではないだろうか。<sup>3</sup>

この小説の展開そのものもこの読みを別の面からサポートしている。1860年代に流行したセンセーション・ノベルに登場するファム・ファタールや、1890年代に数多く書かれた「ニュー・ウーマン・ノベル」の「新しい女」など、ヴィクトリア朝文学では社会の秩序を乱す（あるいは乱しかねない）ヒロインたちは死をもってその代償を払わされたが、この作品で社会から排除されるのは「新しい女」と見なされるメアリやローダではなく、モニカである。夫がある身でありながら、「愛人」のビーヴィスにパリへの駆け落ちを持ちかけるといふ、当時の性コードから大きく逸脱した行為を行う彼女は、堕ちた女の典型的末路の一つである出産による死を迎えさせられる。そのことも、この作品において社会にとっての脅威として描かれているのは、雇用の平等を唱えるフェミニストではなく、ロンドンという街を自由に闊歩するワーキング・ガールであるということを示唆している。モニカの新しさは時代の生み出した新しさでもあることから、本論文では、1890年代という時代を表すアイコンでもあったショップガールとしてのモニカについて考察を行った後、彼女の生き方をこの作品のヒロイン、ローダと比較しながら、作者ギッシングの描く理想の女性の生き方と、作品の結末の意味について考えていきたい。

## 1. ショップガールの台頭と脅威

ヴィクトリア朝時代、言説上、公私、階級、男女の領域分離・役割分担は明確に区別され、また、明確に区別することの重要性が主張されていた。そうした境界線を曖昧にする行為を行う者は社会に脅威を与える存在と見なされ、人々のひんしゆくを買った。ルーシー・ブランド (Lucy Bland 118) が解説するように、公的な世界とは男性の世界であって、女性がそこに進出することは許されていなかったため、“public woman” というフレーズは「売春婦、街娼、女優」と置き換え可能な表現として使用されていた。“public” と “woman” は対立する概念であり、二つの単語を並べて用いることは当時衝撃的でさえあったとブランドは指摘する。また、当時街路は「家庭でも職場でもない境界域」(Colón 447) と見なされ、そこを自由に闊歩するということは、その代償として街路を「職場」としている売春婦に間違われるという危険を受け入れることを意味していた。1887年にお針子のエリザベス・キャス (Elizabeth Cass) がリージェント・ストリートで売春婦と間違われ、誤認逮捕され、世間の注目を集めた事件がその象徴的な出来事であろう。作家のオリヴ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855-1920) も夕食会の後、男性の友人に家まで送ってもらった際に警察官に売春婦と間違われた経験を手紙に綴り、『デイリー・ニューズ』 (*Daily News*) 紙宛てに送っている。そして街路を自由に闊歩するということは、切り裂きジャックによる連続殺人事件が示すように、運が悪ければ命を失う危険性と隣り合わせになることも示唆していた。<sup>4</sup> もしも売春婦には間違えられずに済んだとしても、見知らぬ男性に付きまとわれ、「ストリート・ハラスメント」を受ける確率が高かった。<sup>5</sup> マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835-1910) は旅行記『ヨーロッパ放浪記』 (*A Tramp Abroad*, 1880) で当時の様子を、

[アメリカでは] レディは一日中いつでも通りを思いのまま行ったり来たりすることができて、誰か男性から痴漢行為を受けたりすることなど決してあり得ない。しかし、もしもレディが付き添いなしでロンドンの通りを歩いていたなら、たとえ日中であろうとも、彼女は見知らぬ人に声をかけられ、

侮辱される可能性が非常に高い——それも泥酔した船乗りにはなく、ジェントルマンらしい態度を取り、ジェントルマンの衣服を身にまとっている男たちから、である。(485)

と綴っている。

しかし、ヴィクトリア朝とエドワード朝のショッピング街としてのウエスト・エンドの発展を研究したエリカ・ラパポート (Erika Diane Rappaport) の研究書 *Shopping for Pleasure* などに詳しく紹介されているように、19世紀後半になると、商業地区としてのウエスト・エンドの発展やデパートの出現、女性用クラブの発展や女性向けの雑誌による買い物の奨励などで、ショッピングを目的に多くの中産階級の女性たちが大都市ロンドンに進出し始める。なぜ女性たちにとってショッピングが「<sup>アミューズメント</sup>娯楽」の一形態となったのかを分析した記事「ショッピングの哲学」(“The Philosophy of Shopping,” 1875) など、女性の買い物客とショッピングという行為の関係について分析する論文が当時の雑誌にいくつも掲載されていることが、いかに多くの中産階級の女性たちがロンドンに押し寄せていたのかを物語っている。また、ロンドンに次々と現れるカフェ、ティールーム、公共の交通手段としてのオムニバス、鉄道、地下鉄、そして公衆トイレを使いこなすことで、中産階級の女性たちが大都市ロンドンを自由に闊歩するようになっていくと、中産階級の女性が街路を一人で自由に動き回ることが「モダニティ」の象徴と見なされるようになっていった<sup>6</sup>——「あちこち動き回る能力、公の場所で自信にみなぎっていることがモダン・ウーマンの特質となった」(Walkowitz, *City of Dreadful Delight* 68)。マス・マーケットの拡大によって増大していく、こうした中産階級の女性買い物客たちは、いわゆる「フラヌール (flâneur)」たちにとって、自分たち(だけのものでは)の領域に進出してくる「規律を乱す存在」(Rappaport 6) として語られるようになっていったのである (Rappaport 116-17)。

そうした買い物客にサービスを提供する側として必要不可欠だった職業の一つが女性の従業員、ショップガールであった。<sup>7</sup>

この都市風景の中に新しい人物たちが登場した。最も顕著だったのは「ビ

ジネス・ガール」だった。彼女たちはレディでもなく、売春婦でもない、経済第三次産業に従事している働く女性たちで、ロンドンの中心街に作られた、デパートという新しく女性化された世界に惹き付けられた大量の「女性の買い物客」に店員として仕えた。(Walkowitz, *City of Dreadful Delight* 24)

デパートの出現と急速な発展によって、ショッピングガールの数が激増し、彼女たちの存在が「極めて人目を引くように」(Cox and Hobley 65) なってくると——1895年に『アイドラー』(*The Idler*) 誌に掲載されたM・A・ベロック(M. A. Belloc)の論文「ショッピングガール」(“The Shop-Girl”)の表現を借用すれば、彼女たちが「至る所に存在する」(12) ようになってくると——、彼女たちもまた、女性の買い物客同様に、ロンドンという街を、消費、あるいは余暇を楽しむことを目的に、公共の交通手段を使いこなし、自由に動き回る女性という「脅威を体現する」(Parsons 44) 存在となっていく。

「ショッピングガール」という新しいカテゴリーは、都会でシャペロンを伴わず、誰の監視下にもない状態で生活している若い働く女性たちと関連付けられていた一連の社会習慣を確固たるものにした。……彼女たちは結婚していない女性として、たとえどんなにわずかなものであったとしても、自分たちの余暇を好きなように使う自由を持っていた。家族から離れて暮らしているため、女性の店員たちは……仕事においても余暇活動においてもある程度の行動の自由があった。(Sanders 20-21)

ギッシングが『女王即位50年祭の年に』(*In the Year of Jubilee*, 1894)でヒロイン、ナンシー・ロードの「自由」を象徴する際の比喩にショッピングガールを用いていることは示唆的である——「彼女の感情は解き放たれたショッピングガールの感情とほとんど差異はなかった」(58)。

ヴィクトリア朝後期のワーキング・ガールの表象について分析したマリンの研究書 *Working Girls* によると、当時「まさにモダニティそのもののシニフィアン」(12) として扱われていたワーキング・ガールたちの中でも、ショッピングガールこそが「モダニティのトレンドイな具象化」(128) であり、多くの作家たちが自分たちの作品の主人公にしたがり、巷にはショッピングガール・ロマンス小説があふれ返ることになった(120, 124-25, 128, 129, 154)。

しかし、概していつの時代も、新しいものは必ずしも好意的に受け入れられるものではなく、時として(特に保守的な考えを抱いている人々から)社会から排除されるべき存在として非難の対象と見なされがちである。19世紀ヴィクトリア朝のショップガールもその例に漏れなかった。ショップガールたちは父親や夫の財産で散財する中産階級の女性の買い物客と異なり、自ら働き、自活している。権力の行使の一つの形が消費、つまりお金を自由に使うことだとすると、ショップガールを始めとするワーキング・ガールたちの脅威は、自ら稼いで使うという、本来女性に許されていなかった主体性を持っていることに見出すことができる。彼女たちは、結婚しなくても生きていく道が女性にもあることを広く知らしめる存在として、ヴィクトリア朝社会の理想を根底から覆しかねなかったのである。

まず、ショップガールは階級の境界線を曖昧にする存在と見なされていた。そもそも店舗というものは、商売に携わる下層の階級である店員が、本来ならば交流することなどあり得なかった上層の階級を相手にカウンター越しに取引を行うことによって、階級の境界線を曖昧にする場所に他ならなかった。新しく登場した労働者階級のショップガールたちは、そこで身分不相応な高価な衣装——「階級を交差する変装」(Mullin, *Working Girls* 100)——を身に着け、時として流行の先端を行く商品をマネキンとして身にまとい、上流階級の顧客にサービスを提供した。彼女たちは職業上、自分を結婚市場の商品として顧客である男性に高く売る方法を心得て(いると語られたり (Mullin, *Working Girls* 104, 119, 129)、表象されたりして (Rappaport 197-98, 212)) おり、実際に自分たちよりも上の階級の男性と結婚して立身出世を果たすことがあった (Belloc 16; Rappaport 200; Cox and Hobley 80)。しかしその一方で、『余った女たち』に登場するパーフットの相手のエイミー・ドレイクや、モニカと同僚のミス・イードのように、墮ちた女や売春婦へと落ちていくこともあ(ると広く主張されてお)り (Mullin, *Working Girls* 115-19, 129)、ショップガールはまさに「階級の境目」(Rappaport 201; Sanders 3, 29) にその身を置いていると考えられていたのである。<sup>8</sup> そのため、彼女たちをヒロインにした物語では「(結婚によって階級の上昇を果たすか、売春婦へと下降していくか、という) 二つの物語がショップガールの物語を構成していた」(Sanders 196)。

そして、このように階級の境界線に存在すること、つまり、「レディでもなく、売春婦でもない」(Walkowitz, *City of Dreadful Delight* 24, 46) ことは、性に関する境界線をも曖昧にすることを意味した(Mullin, *Working Girls* 118-19) — 「新たに自立し、生計を立て、カウンターの後ろからサービスを提供する、魅惑的に着飾った女性たちが、こうした〔家庭の天使か悪魔の遣わした女誘惑者かという〕流砂の上に足を踏み入れ始めた」(Cox and Hobley 65)。男性たちの中には商品を販売するショップガールは彼女たちの性をも商品として販売しているのではないかと性的幻想を抱く者もいたという(Walkowitz, *City of Dreadful Delight* 46)。<sup>9</sup> その結果、ショップガールは「1880年代初期までにセクシュアリティの通俗のアイコンとして広く世間に定着していき」(Mullin, “The Shop-Girl Revolutionary” 201)、言説上では「性的魅力と不道德」(Mullin, “The Shop-Girl Revolutionary” 201)を表象し、公共の風紀を乱す存在として危険視されていったのである。

## 2. モニカの「新しさ」と「危険性」

モニカ・マドンは、当初まさにこうした「モダニティ」を体現するショップガールとして『余った女たち』に登場する。彼女がいかに「新しい」存在として描かれているのかは、彼女がロンドンという都会での生き方に見事に適応していることが端的に示している。リンダ・ニード(Lynda Nead)の研究書 *Victorian Babylon* やリチャード・デニス(Richard Dennis)の研究書 *Cities in Modernity* に詳しいように、19世紀のロンドンは様々な開発事業の最中にあり、刻々とその姿を変えていた。しかしモニカは迷うことなくロンドンを闊歩する。最も顕著なのは、「かつて立ち入りが禁止されていた公的な場所に女性たちが入っていくことの表現」(Parsons 97)として用いられ、「1880年代と90年代の女性に街路で脅威を感じることなくロンドンの中を動き回り、観察することを可能にさせた」(Parsons 97) オムニバスを、そして「近代化の乗り物」(Daly 463)、「進歩のアイコン」(Daly 464)、「モダニティの先駆け」(Daly 470)であった鉄道を、さらには「常に展開していくモダニティの連続そのもの」(Welsh 12)であった地下鉄を実に巧みに使いこなし、自由にロンドンを行き来することを楽しんでいる点

である——「彼女は日曜日の何時間かをロンドンを自由にあてもなく歩き回って過ごすことが好きだった」(31)。すでに述べたように、鉄道が次々と敷設され、地下鉄が目新しかった当時のロンドンの路線図は複雑で、乗り入れも多く、新しい駅が開設されたり、それに伴って古い駅が閉じられたりしたために、目まぐるしく路線図が変わっていた。そのため、ラパポートの第4章に詳しいように、女性向けの雑誌がロンドンに不慣れな女性のためのシャベロン役を買って出たが、モニカはそうしたものを必要としない「モダンガール」であった。<sup>10</sup>

そして、モニカは前述したショッピングガールの否定的イメージを体現する女性でもあった。モニカは自分に魅力があることを知っている。ロンドンの通りを歩き、男性たちが自分に魅了されるのを実体験している——「彼女は自分が器量がいいことを知っていた。これまで何度も男たちが通りで彼女の後を追いかけて来たし、彼女と知り合いになろうとした」(38)。将来性のない過酷な職場から逃れるため、生きていく手段として結婚を考え始めたとき、ショッピングガールとして消費文化に手を染めた経験を持つモニカは、自らを商品化し、愛してもいない男性に自分を高く売ることに成功する。温和なメアリでさえ、エドマンド・ウイドウソンとの結婚を知らされた際、「店で鍛えられたおかげでしょうね」(136)とコメントしている。結婚と家庭という私の領域に、商品の売買という公の領域の価値観を持ち込んだ彼女は、領域分離を唱道していたヴィクトリア朝社会から見て、危険な存在として描かれていると解釈することができる。

さらにモニカは、独立して働いた経験があるために、家に閉じ込められた存在でいることに満足せず、結婚しても夫の束縛を嫌い、家庭に収まろうとしない。彼女はローダやメアリのようなフェミニストよりもずっと危険な存在として描かれている。メアリが得た自由は自ら稼いだお金によるものではないため、ある意味、彼女の消費には主体性が欠けている。その一方でローダとモニカは自ら稼いで、自活することで、自由を経験している。ローダはその自由を他の女性たちにも経験させようと、メアリの学校に賛同するが、彼女の求める自由は公の領域での職の機会の平等に留まっている。ところがモニカは職場ではなく、私の領域である家庭における男女の平等を求め、夫を苦しめる。性関係に男女平等を持ち込もうとしてい

る点で、つまり、家庭の内と外という両領域での自由を求める点で、モニカはこの作品内で誰よりも危険視されるべき女性として描かれ、夫ウイドウソンにとって、そして、当時の男性たちにとっての悪夢を体現してしまう負の存在として描かれているのだ。

しかし、確かにモニカはウイドウソンの視点で語られるとき、結婚が破綻し始めた途端、当時の言説上のショップガールの負の要素を体現した存在として読者の前に提示されるようになるが、モニカが本当に(男性たちにとって、そして家父長制社会にとって)危険な存在だったのか、注意して読み解く必要がある。ウイドウソンの視点を有効ととらえれば、ショップガールとして働いた経験がモニカを墮落させたことになり、作者ギッシングは女性の労働を批判し、家庭を賛美しているように見える。実際エイミー・ドレイクは意図してバーフットを、モニカは意図せずウイドウソンを誘惑したことになっているため、この作品ではショップガールがまるで売春婦のように、公共の場で男性たちを誘惑している形になっている。しかし注意して読むと、必ずしも(ショップガールのように)シャペロンなしで街をうろつく女性は皆が皆、売春婦のような危険な存在である、という構図にはなっていない。シャペロンなしでロンドンを行き来する女性はモニカやミス・イードのようなショップガール以外にも存在している。メアリもローダもミルドレッドも一人でロンドンを行き来しているが、男性たちの誘惑にはなっていない。例えばバーフットは第26章でローダに向かって、自分はエイミーに誘惑されたのだと主張し、自己正当化を図っているが、彼は本当に被害者なのだろうか。またウイドウソンこそ今で言う「ストーカー」であり、「モラハラ夫」である。ショップガールをことさら危険な存在として描いて見せるのはバーフットやウイドウソンの語りであって、実は彼らの方が誘惑者、加害者である可能性も見え隠れする。

その可能性はヴァージニアの描写が示唆している。第2章でヴァージニアはラヴェンダー・ヒルからストランドまで一人、徒歩で行く。そして帰りはチャリング・クロス駅のバーで一人ブランデーを飲んでいるが、もう結婚の対象ではなくなった彼女がロンドンのどこを一人でうろつき回ろうと、<sup>11</sup> とがめられないし、非難もされないばかりか、誰も気にもしていない。一人で行動することをとがめられるのは、これから結婚し、夫の所

有物となるであろう女性か、すでに結婚していて夫の所有物となっている女性のみである。売春婦やショップガールが「フラヌール」たちにとっての脅威であった「顕在するフラヌーズ (visible flâneuse)」だとすると、ヴァージニアのような「余った女たち」は脅威どころか、むしろ「無視されたフラヌーズ (invisible flâneuse)」にすぎない。ショップガールは男性たちの語りによって、あたかも脅威であるかのように語られているだけなのだ。<sup>12</sup>

事実、モニカは同僚のミス・イードのように、貧しいショップガールとして街を自由に闊歩したために身を持ち崩したわけではない。彼女はジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) を愛読し、彼が『胡麻と百合』 (*Sesame and Lilies*, 1865) で主張した「家庭の天使」像を現実世界に持ち込もうとしているウイドウソンと結婚し、その保守的な家父長制に根差した理想像により、家に閉じ込められそうになったため、そこから逃れようとして、結果、身を持ち崩している。彼女が過去にショップガールだったために考えが墮落しているのだというのはウイドウソンの言い分でしかない。モニカはウイドウソンが恐れていたように、夫の指導の効果がなかったために墮ちていったのではなく、夫の束縛が妻を誤った道へ突き進ませている。つまり、ウイドウソンが主張するように、自由が女性を墮落させるのではなく、自由を奪われて女性は墮落していったことになっているのである。

そう考えると、確かにモニカは結婚後も夫の命令に背き、勝手に振る舞うことで悲劇的な結末を迎えるため、一見したところ、女性は何をしでかすか分からない存在なので、男性は女性が道からそれないように指導しなければならぬという家父長制的な男女観をギッシングが支持しているように見える。しかし、結婚に臨むモニカの間違った心構えのせいだけでウイドウソン夫婦が不幸になったわけではなく、ウイドウソンによる縛り付けにも問題があったことになっている以上、労働という隷属状態から逃れたい一心で愛してもいない男性と結婚したら、それはもう一つの隷属状態であったというモニカの不幸は、当時の結婚制度、男女観の是正の必要性を説こうとするギッシングの結婚批判であったとも考えられるだろう。

### 3. 女性の理想像——女性は公私での充足を求めてはならない

では、こうしたショップガール、モニカの結婚生活の不幸をヒロイン、ローダの恋愛の破綻と同時進行で描き出すことで、ギッシングは読者に何を伝えようとしているのだろうか。改めて作品全体を俯瞰すると、『余った女たち』には家庭での幸せと仕事での満足の両方を手にできる女性が一人も登場していないことに気づかされる。女性が家庭と仕事の双方での幸せを求めると、必ず失敗に終わっている。パーフットを誘惑したエイミー・ドレイクは母となろうとして罰せられた。モニカは公私を区別する境界線をまたいで、双方の世界で自由を得ようとして抹殺された。生き残りを許されるのは、公の世界であろうとも、私の世界であろうとも、片方に留まることを自らに課している女性だけである。ローダ、メアリ、そしてミルドレッドのようにメアリの学校で学ぶ生徒たちは、未婚を貫いたうえで仕事に生きることを選択しているので公の世界に留まることを許されている。実はこれは『余った女たち』に特有の設定ではない。女性に家庭と仕事の両立が許されていないことは、ギッシングの別の作品『渦』(*The Whirlpool*, 1897)のヒロイン、アルマ・フロシガム・ロルフの人生にも示されている(ただし、デイヴィッド・クレイマー (David Kramer 324-26)の指摘にもあるように、アルマが仕事で成功できないのは性別の問題ではなく、単に彼女に能力がないことになっている)。その結果、男性も家庭に留まり続けることを自らの意思で選んでくれる伴侶を見つけた者のみ、幸せを保証されている。本人の意思に反し、妻に家庭に留まるように無理強いをしたウイドウソンは最後にホモソーシャルな世界で生きることを余儀なくされる。このように、『余った女たち』において女性に家庭と仕事の両立が許されていないのは、この作品が書かれたヴィクトリア朝という時代が性差による分業を理想としていたせいなのだろうか。しかしエヴァンズ(2-3)が論じているように、バーバラ・ボディション (Barbara Leigh Smith Bodichon, 1827-91) 夫妻のように当時多くのフェミニストたちは理解ある夫とともに家庭と仕事の両立を果たしていたので、これはギッシング自身の女性観、家庭観によるものと見なすべきだろう。

さらに重要なのは、結婚という道を選択しない場合、お金のためではな

く、仕事にやりがいを見つけられることが、女性が幸せになるための必須条件となっている点である。ロバート・セリグ (Robert L. Selig) が指摘するように、『余った女たち』の男性の登場人物たちにとって仕事とは生きていくためのお金を得る手段でしかなく、彼らの生きがいとはなっていない。バーフットもウィドウソンも財産を相続した途端に、惜しげもなく仕事を辞めている。<sup>13</sup> しかし、仕事を単なる生計の手段としている男性の登場人物たちとは異なり、女性の登場人物たちに関しては、社会進出を認められる条件として、(両立を望まないことに加えて、)利益のために働くのではなく、仕事にやりがいを見出して取り組むことが求められており、そのことは女性のための職業学校を経営しているメアリ自身の口を通してはっきりと語られている。メアリは、人は「徹底的にしっかりとした訓練を受け、喜びを感じる」(111) ことができる仕事に就くべきであると主張し、「男性同様、女性も一生の天職<sup>コーリング</sup>を持てるように育てられるべきだ」(111) と説いている。こうした描写から、スーザン・コロン (Susan Colón) は『余った女たち』にはギッシングが理想とする「プロフェッショナル」のあるべき姿が描かれていると論じている。そこでこうした考察を踏まえて、この作品で重要な役割を果たすもう一つのカップル、ローダとバーフットの描かれ方と、そこからうかがえるギッシングの主張を読み取ってみよう。

#### 4. ローダの成長とバーフットの限界

ローダとバーフットはお互いに惹かれ合っているものの、どちらに主導権があるかというパワーバトルに興じている二人が一体どこまで真剣に相手を想っているのかは判断が難しく、読み手の解釈にゆだねられている。しかし前節で論じたように、この小説の女性たちにとって仕事と家庭の両立は実現不可能だとすると、ローダに対して仕事は続けながら共にヨーロッパ大陸を観光旅行して過ごそうと持ちかけるバーフットの提案は不適当なものでしかない。ローダにとっての難問は「仕事か恋愛か」であって、バーフットが考えるように、「結婚 (宗教上ないし民法上公認された結びつき) かフリー・ユニオン (宗教上ないし民法上の公認された結びつきがない共同生活) か<sup>14</sup>」ではない。つまり、二人のパワーバトルは最初から議論の土

俵が異なっている。「仕事か恋愛か」、つまり現在の職か、バーフットの妻／愛人という新しい「職」か、で選択を迫られているローダは、この「転職先」が職として将来性があるかどうかじっくり吟味しなければならない。そこでバーフットが本気で自分を愛しているか確かめようと、バーフットを試し、最終的に別離を選択する。

読み手によってはローダの迎えた結末は不幸に見えるかもしれない。例えばバーフットを失って陥ったローダの結末部での孤独を「敗北」(14)と呼ぶアリソン・コーツ (Alison Cotes) は、ローダを「『新しい女』の抱える問題点を表象する存在」(15)と考え、「この小説の中で作者に全面的に認められている唯一の登場人物」(6)であるメアリこそがギッシングの「解放された女性の理想像」(15)であると主張している。しかし、家庭の外と内での両方の充足を求めたために徹底的に罰せられるモニカに比べれば、「仕事か恋愛か」という二者択一において、仕事を選択した(選択せざるを得なかった)ローダも、いわゆる女としての幸せをあきらめ、後進の指導に生きる道を見出しているメアリ同様、この小説では否定的に描かれているわけではなく、少なくとも敗者ではないはずだ。ローダはバーフットに「振られて」(Mullin, *Working Girls* 142)、致し方なくフェミニストの道に戻ったのではなく、彼との決別以前に大義のために生きることを決めている。その点を考慮し、ローダの方がバーフットを「棄てた」(Kennedy 24; Young, *Culture, Class and Gender in the Victorian Novel* 147; Colón 454)のだと述べる研究者も存在している。ローダはおそらくバーフットとの関係の破綻で謙虚さを学び、すでにバーフットに失恋しているメアリのように他者の気持ちを思いやれるようになり、今後は弱者に優しくなれるように思われる。<sup>15</sup> 以前は性愛を軽視し、ペラ・ロイストンを切り捨て、モニカの言い分に聞く耳を持たなかったローダが最後にモニカの女兒に同情を持って接しているラストシーンは、モニカの哀れさや女性の惨めさを表すのではなく、ローダの成長と、未来への期待(メアリと共にローダは公の世界で大義を掲げて生きていくことだろうという期待)を読者に与えているのではないだろうか。

こうしたローダの「成長」(Cronin 11)とは裏腹に、バーフットには成長の兆しが見られない。彼の選択はむしろ「後退」(Kennedy 25)ととらえる

べきものとなっている。<sup>16</sup> バーフットの限界は彼とドクター・マドンの類似からうかがい知れる。家父長制が理想だ、あるべき姿だというのは、言い換えれば、女性は外で働いてはならない、自立してはならないというのなら、「余った女たち」を生み出さない世の中を女性たちに用意できる社会でなければならない。そのことを端的に示すために、冒頭で、女性は「家庭の天使」たるべきだと主張し、娘たちに適切な教育を与えず、十分な財産を遺すことなく事故死するドクター・マドンが引き起こす、残された六人の娘たちの不幸な人生が描かれることになる。批判の矛先は何とか公の世界で生き残ろうとするマドン家の娘たちが体現するフェミニズムにではなく、そもそも一つの家庭で、元々は六人、そして物語の中心となる三人もの「余った女たち」を生み出してしまった家父長制の理念に向けられていることは明らかである。また、ドクター・マドンは文化人を気取り、無為に過ごす夢想家、「ロータス・イーター」(9)であった。このドクター・マドンの姿とバーフットを比較してみよう。バーフットは二度財産を相続するが、最初に結構な財産を手にしたとき、彼は労働者階級のために働くという当初掲げていた大義を放棄し、世界旅行に出かけ、二度目に多額の財産を手にすると、上の階級の人々と付き合うようになり、ローダを棄て、アグネス・プリスンデンと結婚することから、経済力の伴った第二のドクター・マドンになる可能性が高い。バーフットが当初ローダにフリー・ユニオンを求めたのは、彼女とのパワーバトルを楽しもうとしたためだけではなく、彼自身が何度か認めているように、単に彼の年取では(彼の理想とするレベルで)妻(家族)を養うお金がなかったことも実は大きな理由だったのだろう。そう考えると、もしもエイミー・ドレイクとミス・イードの転落が同じジョップガールだったモニカがなっていた可能性のある姿ならば、ホワイト・カラーの専門家となることを目指したベラ・ロイストンの転落はローダがなっていた可能性のある姿なのかもしれない。バーフットはローダに「ふさわしくない」(Colón 455)と指摘したり、バーフットを「自分の性的満足のために他人を利用する人間」(Kramer 326)と見なしたりする研究者が存在するのもこうした彼の限界に基づくものなのである。

## 結び——エンディングの意味

最終節では、女性をどのように扱うかにバーフットの限界を見出したが、実はよく読むと彼の無責任さは、大人の女性をどう扱うかよりも、子どもをどう扱うかにより端的に現れている。誘ってきた女性を無慈悲にも棄て去るのはともかくとして、彼には自分の子どもの死を笑い話にしてしまう非道さがある。事実、この作品で最も浮かばれないのは子どもたちである。マドン家の娘たちに始まり、バーフットの子どもも、そしていわば両親に見棄てられたウィドウソン夫妻の娘も、子どもたちは皆、辛い経験をさせられている。冒頭でマドン家の娘の養育の失敗が細かに描写され、最後にモニカの娘の養育がヴァージニア、アリスそしてローダに託されて終わるこの小説の隠されたテーマは子どもの養育なのではないか。そこで、最後に結びとして、この小説のエンディングの意味についての一考察を試みておきたい。

メアリが目指し、ローダが共感したのは、仕事と家庭の両立ではなく、結婚できなかつた女性、つまり家庭を持たない女性が生きていくために、仕事で成功する道に進む手助けをすることであった。これまで考察してきたように、この点で二人はこの作品において非難の矛先に立たされていない。むしろこの作品で問題視されているのは、ローダとバーフットが議論を戦わせているフリー・ユニオンが生む問題や、モニカが体現する、家庭がありながら外でも性的に自立するということが生む問題の方であった。特に、自らの意思で結婚制度の外で性的関係を結ぶ大人の男女はよいとしても、そこに生まれてくる、法的に守られていない子どもをどうするのかについて、当事者たちが深く考える責任があることをこの作品は示唆している。エレイン・ショウォルター (Elaine Showalter) の研究書 *Sexual Anarchy* の第3章によると、メン・アンド・ウィミンズ・クラブを主宰したカール・ピアソン (Karl Pearson, 1857-1936) たちがフリー・ユニオンを伴う社会主義を主張した際、周囲の女性たちを不安に陥れた理由の一つが子どもへの責任の取り方であったといい、ショウォルターはローダとバーフットの間を、男女の性関係のあるべき姿について論じ合うオリヴァ・シュライナーとピアソンとの間で交わされた手紙での議論と比較して

いる。<sup>17</sup>

この、子どもへの責任という問題を表面化させて読者に提示しているのはバーフットである。バーフットがそのときの感情におぼれて女性と関係を持つのは勝手であるし、相手の女性も同意の上で関係を持ったのであれば、バーフットを責める資格はない。しかし、生まれてきた子どもに愛着も責任も感じないバーフットのような態度を取る親がいる限り、子どもの不幸という問題は生じ続ける。ギッシングが『余った女たち』を執筆していた当時、中産階級の出生率が下がり、兵役を希望するイギリス人男性たちの体力劣化が問題視されたため、このままではイギリス人という人種が退行してしまいかねないと、強い子どもを育てていく必要性に迫られていたことを鑑みると、<sup>18</sup> バーフットの無責任さがより際立ってくる。ローダがバーフットを見限る理由は単独ではないものの、第10章で初めて二人きりで議論する機会を得た際に、愛のなくなった結婚から男性が自由になる権利を主張するバーフットに向かって、男親の子どもへの愛情について問いかけていることから、ローダは子どもへの親の責任を重要視していることがうかがえる。ローダはバーフットの彼自身の子どもへの無関心さを伝え聞き、バーフットと自分がフリー・ユニオン契約を結び、子どもが生まれてきた場合、彼がその子どもにも責任を持たないであろうことへの不安と不信を抱いた可能性は高い。

そう考えると、この小説は最後にローダがモニカの産んだ女兒に「可哀そうな子」(370, 371) とささやいている場面で終わっているが、ここはバーフットに振られ、一人さみしくたたずみ、自分の孤独を女兒に重ねている物悲しい場面としてとらえるべきではないように思われる。ローダはそれぞれ違った意味で、親であるウイドウソンにもモニカも見棄てられた女兒の行く末を真に案じているのであり、むしろそこに作品のテーマの一つがあるのではないか。母は彼女を産んでなくなり、父は彼女を不義の子と考え、愛情を覚えていない。こうした子どもが生まれてくることへのローダから、そして作者ギッシングから読者への、そして社会への問題提起を読み取るべきなのだ。

この作品で生き残った女性たちに託された仕事は(モニカの)子どもの養育という母親業である。ローダが最後にモニカの女兒に同情を持って接

しているラストシーンは、前述したように、ローダの成長と、未来への期待(メアリと共にローダは公的な世界で大義を掲げて生きていくことだろうという期待)と同時に、ローダが責任を持ってこの女兒を育てていくことへの期待感を読者に与えようとしている場面設定としてとらえることができる。そうとらえるとエンディングにさらに光が差してくる。ヴァージニアとアリスは「生計を得るための手段ではなく」(128)、妹モニカの遺した女兒のために「ライフワーク」(128)としての学校経営に夢を持つようとしている——「収入目的ではなく、目的意識や使命感で選んだ職業をアリスが見出したことは明らかだった」(370)。ウイドウソンに援助してもらっているため、二人はもう働く必要がなくなっているにもかかわらず、新たな夢に向かって一歩前進しようとしている。前述のように、この作品は働くことに生きがいを見出している「余った女たち」に対して好意的であることを考えると、マドン姉妹の未来は決して惨憺たるものではないはずだ。ショップガール、モニカ・マドンの不幸に着目することは、このように、私たち読者に新たな作品解釈の可能性を示唆してくれるのである。

#### 注

- 1 『余った女たち』を「ニュー・ウーマン・ノベル」と見なしたり、メアリとローダを「新しい女」と呼んだりする研究者は枚挙にいとまがないため、メアリの学校について触れている論文をいくつか挙げておくと、ジョイス・エヴァンズ (Joyce Evans 1-2)、アリス・マーコウ (Alice B. Markow 64-65)、デイヴィッド・クレイマー (David Kramer 323) などがメアリの学校の原型をランガム・プレイス・サークルが開いた女性雇用促進協会に見出したり、両者を比較したりしている。またアリソン・コーツ (Alison Cotes 15) は、メアリのモデルは女性雇用促進協会の設立者であるジェシー・ブーシェレット (Jessie Boucherett, 1825-1905) であると考えている。
- 2 クレイマーはマーコウとは反対に、ランガム・プレイス・サークルが掲げていた女性の雇用の問題は『余った女たち』が書かれた当時、まだ解決しておらず (323-24)、ギッシングの描く女性の雇用の問題はまさに1880年代、90年代のものであると述べている (316-18, 324, 326-27)。またパトリシア・コミティーニ (Patricia Comitini 535) は、メアリは1840年代、50年代のフェミニストの姿を描いたものであり、ローダは1870年代、80年代のフェミニス

- トの姿を描いたものであると分類している。
- 3 ギッシングは『余った女たち』に、マリンがその研究書 *Working Girls* で一章ずつ割き、当時のワーキング・ガールの典型として挙げているタイプスト、ショップガール、バーメイドの三つのタイプすべてを登場させている。彼の興味が「モダニティ」を象徴するワーキング・ガールを描くことにあったことが推察される。
  - 4 エリカ・ラバポート (Erika Diane Rappaport 123, 262) によると、1887年にミス・スクラッグ (Miss Scragg) という女性がウェリントンからシュルーズベリーを移動中、列車のコンパートメント内で襲われる事件が起こり、新聞紙上をにぎわせ、女性の一人旅への心配が募ったという。また、切り裂きジャックによるヒステリーの時期でもあった1880年代は、ロンドンが国際的な爆弾テロの標的になった時代でもあった (Walkowitz, *City of Dreadful Delight* 25-26)。
  - 5 ジュデイス・ウォーコウイツ (Judith R. Walkowitz) が論文 “Going Public” で、ジャーナリストの W・T・ステッド (William Thomas Stead, 1849-1912) が『ペルメル・ガゼット』 (*The Pall Mall Gazette*) 紙に掲載した女性たちの「ストリート・ハラズメント」の体験談を紹介している。
  - 6 それに伴い、1880年代以降、若い女性に付き添うシャペロンの存在は段々と時代遅れになっていく。当時の様子については1900年に『フォートナイトリー・レビュー』 (*The Fortnightly Review*) 誌に掲載されたメアリ・ジュヌ (Mary Jeune, 1845-1931) の論文「シャペロンの衰退」 (“The Decay of the Chaperon”) を参照されたい。またラバポート (264) は、シャペロンの存在が段々と時代遅れになっていった理由の一つとして、1880年代以降、アメリカから訪れる大量の女性の買い物客の自由さがイギリス人女性に強く影響したことを挙げている。
  - 7 女性の買い物客たちにとってショップガールがいかに欠かせない貴重な存在であったのかは、1895年に『フォートナイトリー・レビュー』誌に掲載されたジュヌの論文「ショッピングの倫理」 (“The Ethics of Shopping”) が詳細に伝えてくれている。また、デパートの店員が男性から女性に変わっていった詳しい経緯についてはリチャード・デニス (Richard Dennis 306) を参照されたい。
  - 8 上昇や下降の道をたどるショップガールをヒロインに据えた物語が多く出版、上演されていたことについては、ラバポート、リズ・サンダース (Lise Shapiro Sanders)、そしてマリンの研究書に詳しい。
  - 9 パメラ・コックスとアナベル・ホブリー (Pamela Cox and Annabel Hobley 76) はショップガールを「男たちの抱く幻想の対象」(76) と見なして追いかけて回したり、就業時間の終了後に帰宅するショップガールたちを待ち伏せ

- したりした当時の男性たちの様子を紹介している。
- 10 この作品にはモニカの職や移動手段以外にも19世紀後半の「モダニティ」が様々なものに象徴されている。例えばフラット (Dennis 224) や郊外の住居 (Dennis 183) などの住宅の描写や、絵画鑑賞などの余暇の過ごし方 (Dennis 83-85) が当時の時代性を映し出している。
  - 11 デニス (157) はヴァージニアが途中ポルノ・ショップで悪名高かったホリウェル・ストリートを通った可能性を指摘している。
  - 12 男性版フラヌールと女性版フラヌーズとの関係についてはジャネット・ウォルフ (Janet Wolff) やエリザベス・ウィルソン (Elizabeth Wilson) の論文を参照されたい。
  - 13 この作品で唯一家庭と仕事の両面からの充足を得ているように見えるトマス・ミクルスウェイトでさえ、天職として打ち込んでいたはずの研究職を、結婚するために必要なお金を稼ぐ手段へと変えることによってのみ、家庭との両立を可能にしている。そしてついに家庭の幸せを手に入れることが叶うと、彼が「哲学者」(102) としての才能、仕事への熱意を急速に失っていき、「俗人」(102) になっていくことは示唆に富む展開である。
  - 14 当時の「フリー・ラヴ」、「フリー・ユニオン」に関する考え方については、カール・ピアソン (Karl Pearson) が1886年に執筆し、翌年『トゥデイ』(*To-day*) 誌に発表した後で、自らの論文集『自由思想の倫理』(*The Ethic of Freethought and Other Addresses and Essays*, 1888) の第15章として掲載した「社会主義と性」("Socialism and Sex") を参照されたい。また、ピアソンの論文のもとになっているメン・アンド・ウィミンズ・クラブにおける議論についてはウォーコウィッツの研究書 *City of Dreadful Delight* の第5章やブランドの研究書の第4章に詳しい。
  - 15 マイケル・クローニン (Michael Cronin) は『余った女たち』をローダの成長記として分析している。
  - 16 ジョージ・ケネディ (George E. Kennedy) はバーフットを変化というダイナミズムに適應できない人物として分析している。
  - 17 エレノア・マルクス (Eleanor Marx, 1855-98) とエドワード・エイヴリング (Edward Aveling, 1849-98)、シュライナーと男性たちとの関係についてはルース・ブランドン (Ruth Brandon) の著書に詳しい。
  - 18 この問題については、当時の退行理論や優生学に関する様々な研究論文や研究書に詳しく載っているが、例えば出生率については事典 *Victorian Britain* の項目 "Population and Demographics" を、イギリス人男性たちの体力低下については『コンテンポラリー・レビュー』(*The Contemporary Review*) 誌に1902年に掲載された論文「どこで兵を見つけるか」(Miles, "Where to Get Men") や、陸軍医療部長による1903年の覚え書き (1904年の『身体の

劣化に関する部局間委員会報告書』(*Report of Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration*) 第1巻の付録Iとして再掲)を、母親業を重視する考え方についてはピアソンの1885年のスピーチ「女性の問題」(“The Woman’s Question”) (1888年に論文集『自由思想の倫理』に掲載)や1894年の論文「女性と労働」(“Woman and Labour”)、そしてグラント・アレン(Grant Allen, 1848-99)の1889年の論文「女性問題への率直な意見」(“Plain Words on the Woman Question”)などを参照されたい。

#### 引用文献

- Allen, Grant. “Plain Words on the Woman Question.” *The Fortnightly Review* 46.274 (1889): 448-58.
- Belloc, M. A. “The Shop-Girl.” *The Idler* 8.43 (1895): 12-17. *ProQuest*. Web. 8 June 2017.
- Bland, Lucy. *Banishing the Beast: English Feminism and Sexual Morality 1885-1914*. London: Penguin, 1995.
- Brandon, Ruth. *The New Women and the Old Men: Love, Sex and the Woman Question*. 1990. London: Flamingo, 1991.
- Carnaffan, Gladys. “Commercial education and the female office worker.” *The White-Blouse Revolution: Female Office Workers since 1870*. Ed. Gregory Anderson. Manchester: Manchester UP, 1988. 67-87.
- Colón, Susan. “Professionalism and Domesticity in George Gissing’s *The Odd Women*.” *English Literature in Transition 1880-1920* 44.4 (2001): 441-58.
- Comitini, Patricia. “A Feminist Fantasy: Conflicting Ideologies in *The Odd Women*.” *Studies in the Novel* 27.4 (1995): 529-43.
- Cotes, Alison. “New Women and Odd Women.” *The Gissing Newsletter* 14.2 (1978): 1-20.
- Cox, Pamela, and Annabel Hobley. *Shopgirls: True Stories of Friendship, Hardship and Triumph From Behind the Counter*. London: Arrow Books, 2014.
- Cronin, Michael. “The Unclassed in *The Odd Women*.” *The Gissing Journal* 31.2 (1995): 1-14.
- Daly, Nicholas. “Railway Novels: Sensation Fiction and the Modernization of the Senses.” *English Literary History* 66.2 (1999): 461-87.
- Dennis, Richard. *Cities in Modernity: Representations and Productions of Metropolitan Space, 1840-1930*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Evans, Joyce. “Some Notes on *The Odd Women* and the Woman’s Movement.” *The*

- Gissing Newsletter* 2.3 (1966): 1–3.
- Gissing, George. *In the Year of Jubilee*. 1894. Ed. Paul Delany. London: Everyman, 1994.
- . *The Odd Women*. 1893. Ed. Patricia Ingham. Oxford: Oxford UP, 2008.
- . *The Whirlpool*. 1897. London: Penguin, 2015.
- Jeune, Mary. “The Decay of the Chaperon.” *The Fortnightly Review* 68.406 (1900): 629–38.
- . “The Ethics of Shopping.” *The Fortnightly Review* 57.337 (1895): 123–32.
- Kennedy, George E. “Gissing’s Narrative of Change: *The Odd Women*.” *The Gissing Newsletter* 18.2 (1982): 12–27.
- Kramer, David. “George Gissing and Women’s Work: Contextualizing the Female Professional.” *English Literature in Transition 1880–1920* 43.3 (2000): 316–30.
- Ledger, Sally. *The New Woman: Fiction and Feminism at the Fin de Siècle*. Manchester: Manchester UP, 1997.
- Markow, Alice B. “George Gissing: Advocate or Provocateur of the Women’s Movement.” *English Literature in Transition 1880–1920* 25.2 (1982): 58–73.
- Miles. (Frederick Maurice.) “Where to Get Men.” *The Contemporary Review* 81 (1902): 78–86.
- Mullin, Katherine. “The Shop-Girl Revolutionary in Henry James’s *The Princess Casamassima*.” *Nineteenth-Century Literature* 63.2 (2008): 197–222.
- . *Working Girls: Fiction, Sexuality, and Modernity*. Oxford: Oxford UP, 2016.
- Nead, Lynda. *Victorian Babylon: People, Streets and Images in Nineteenth-Century London*. New Haven: Yale UP, 2000.
- P. (Karl Pearson.) “Socialism and Sex.” *To-day* 39 (1887): 42–55. *ProQuest*. Web. 5 Oct. 2017.
- Parsons, Deborah L. *Streetwalking the Metropolis: Women, the City, and Modernity*. 2000. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Pearson, Karl. “Woman and Labour.” *The Fortnightly Review* 55.329 (1894): 561–77.
- . “The Woman’s Question.” *The Ethic of Freethought and Other Addresses and Essays*. 1888. 2<sup>nd</sup> ed. London: Adam and Charles Black, 1901. 354–78. *HathiTrust Digital Library*. Web. 27 May 2017.
- “The Philosophy of Shopping.” *The Saturday Review* 40.1042 (16 Oct. 1875): 488–89. *ProQuest*. Web. 12 June 2017.
- “Population and Demographics.” *Victorian Britain: An Encyclopedia*. Ed. Sally Mitchell. New York: Garland Publishing, 1988. 617–18.
- Rappaport, Erika Diane. *Shopping for Pleasure: Women in the Making of London’s West End*. Princeton: Princeton UP, 2001.

- Report of Inter-Departmental Committee on Physical Deterioration Vol. I. Report and Appendix.* GBPP 1904, XXXII. Cd. 2175. *House of Commons Parliamentary Papers Database. NII-REO.* Web. 30 May 2017.
- Ruskin, John. *Sesame and Lilies.* 1865. Ed. Deborah Epstein Nord. New Haven: Yale UP, 2002.
- Sanders, Lise Shapiro. *Consuming Fantasies: Labor, Leisure, and the London Shopgirl, 1880–1920.* Columbus: Ohio State UP, 2006.
- Schreiner, Olive. “Olive Schreiner to Daily News, 28 December 1885, Harry Ransom Research Center, University of Texas at Austin, Olive Schreiner Letters Project transcription.” *The Olive Schreiner Letters Online.* Web. 6 Sept. 2017.
- Selig, Robert L. “The Gospel of Work in *The Odd Women*: Gissing’s Double Standard.” *Supplement to the Gissing Newsletter* 15.1 (1979): 17–25.
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siècle.* 1990. London: Virago, 1999.
- Strachey, Ray. *The Cause: A Short History of the Women’s Movement in Great Britain.* 1928. London: Virago, 1978.
- Twain, Mark. *A Tramp Abroad.* 1880. London: Chatto & Windus, 1912. *Internet Archive.* Web. 20 Sept. 2017.
- Young, Arlene. “Character and the Modern City: George Gissing’s Urban Negotiations.” *English Literature in Transition 1880–1920* 49.1 (2006): 49–62.
- . *Culture, Class and Gender in the Victorian Novel: Gentlemen, Gents and Working Women.* Basingstoke: Macmillan, 1999.
- Walkowitz, Judith R. *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London.* 1992. London: Virago, 1998.
- . “Going Public: Shopping, Street Harassment, and Streetwalking in Late Victorian London.” *Representations* 62 (Spring 1998): 1–30.
- Welsh, David. *Underground Writing: The London Tube from George Gissing to Virginia Woolf.* Liverpool: Liverpool UP, 2010.
- Wilson, Elizabeth. “The Invisible Flâneur.” *New Left Review* 191 (1992): 90–110.
- Wolff, Janet. “The Invisible Flâneuse: Women and the Literature of Modernity.” *Theory, Culture and Society* 2.3 (1985): 37–46. Rpt. in *Feminine Sentences: Essays on Women and Culture.* Berkeley: Polity, 1990. 34–50.

——— 日本女子大学教授

## Summary

### Monica Madden the Shopgirl: Representations of Working Women in *The Odd Women*

Kaoruko Sakata

*The Odd Women* (1893) by George Gissing has often been interpreted as a New Woman Novel, with Mary Barfoot and Rhoda Nunn presented as New Women. It is Monica Madden rather than Mary or Rhoda, however, who embodies the modernity of the 1890s. As Monica's modernity is representative of the newness of the times, this paper first pays attention to her as a shopgirl, one of the cultural icons of the 1890s; and then compares her life with that of Rhoda, the heroine, so as to find out what lifestyle Gissing suggests as proper for women; and finally, considers the significance of the novel's ending.

The first chapter examines the increase in the number of shopgirls in the latter half of the nineteenth century and the threat they posed to Victorian society, and then the second chapter discusses how dangerous Monica is perceived to be by society. The next two chapters focus on what Gissing tries to tell readers by depicting Monica's unhappy married life with Edmund Widdowson and the failure of Rhoda's love affair with Everard Barfoot, and show that Rhoda's preference for work over love is not necessarily depicted negatively. The concluding section of this paper gives full consideration to the ending of the novel. If this novel attaches importance to the upbringing of children, the ending—where the care of Monica's daughter is entrusted to her elder sisters, Alice and Virginia, and Rhoda—suggests the possibility that Gissing closes the novel on a hopeful note.